

平成 28 年度 第 3 回地域福祉活動計画策定・推進評価委員会 会議録

日 時：平成 29 年 2 月 27 日（月）18：30～20：30

会 場：練馬区役所本庁舎地下多目的会議室

1. 事務局長挨拶

第 4 次地域活動福祉計画は、平成 27 年度から 5 年間だが、実質は平成 28 年 2 月頃できあがったため、丸 1 年経ったところ。その間、ネリーズというものを提唱したが、現在 346 名の登録あり。目標 700 名の約半分の登録があったが、質の確保に気を配らなければならない。本日は、各地区のネリーズの取り組み報告と、前回、時間が足りずに議論が深められなかった点、レインボーワークとの統合を見据えた小地域福祉活動の展開方法と、社協の広報活動について意見をいただきたい。本日は、趣向を変えて、円形での会議。初めての取り組み。楽しみでもある。

2. 配布資料確認

3. 第 4 次地域福祉活動計画の進捗状況報告

委員長 今日は、趣向を変えて、円形の会議。いつもは委員の後ろにたくさんの職員がいるが、なかなか意見が出にくい。今日は、もっと砕けた雰囲気、ざっくばらんに何でも思っているところを言っていたきたい。

職員 【資料 1】シンポジウム報告(平成 28 年 11 月 30 日(水)於：練馬区立生涯学習センターホール)
当日は、職員を含め、127 名の参加者があった。委員の皆様にも多数ご参加いただいた。飯村先生の基調講演では、「今、なぜネリーズなのか？」をテーマに講演。現代は、SNS をはじめとするリアルな場のないコミュニケーションが普及しており、すぐにつながれるが、希薄な関係であるからこそ、実際に顔を合わせてつながる場が必要であること、またネリーズは「しなければならない」「こうでなくてはならない」ということではなく、まず、つながりあうことが重要とのお話をしていただいた。シンポジストからの話は三者三様。

◆豊さん：見守り訪問員活動に参加。雨の日に「今日は訪問しなくていいよ」と気遣ってもらったことから、自分が見守っていると思っていたが、実は見守られていることに気付いた。

◆渡邊さん：ネリーズ懇談会を通して、私流のネリーズがあつて良い、自分なりの活動をしてきたいと、ネリーズについて考えることが、地域の繋がりにつながった。

◆中村さん：脳梗塞の経験から、つらい思いもしたけれど、自分でもできることを考えて、諦めずに人生を切り開いてきた経験を伝えていきたい。

基調講演、シンポジウムを通し、参加者からは「自分にできることをやればよい」「何かやらなくてはいけないではなく、まずは気に掛けながら過ごすことで良いということ学んだ」との感想が聞かれた。ネリーズについて知ってもらうことが、地域のつながりについて知ってもらうきっかけになった。また、新たなネリーズの登録者や、懇談会、勉強会の参加者にもつながったのは喜ばしいこと。(後ほど J:COM 取材映像放映。)

【資料 2】 懇談会報告

◆(大泉地区)平成 28 年 12 月 22 日(木) 於：大泉障害者地域生活支援センターさくら(参加者 12 名)
さくらセンター長より、障害のある人が地域で感じている困りごとや、普段からできる障害者への関わり方についての説明。今まで障害のある方にどう関わったら良いかわからなかったが、今度声を掛けてみたいとの感想、また、福祉施設向け、障害者向けにワークショップを開くということで、施設や障害を知るきっかけができれば良い、現状を知ったからこそ、ネリーズとして

よっとできることといったヒントにつながったとの声があった。センター長の話を他の人にも聞いてほしいという意見もあったが、他の場所を設定して話をしてもらおうというよりは、まずは今日聞いた一人ひとりが感想を周りに伝えていくことがネリーズの活動ではないか、との意見を明星委員からいただいた。

◆（光が丘地区）平成 29 年 1 月 26 日（木）於：やすらぎ夢工房（参加者 13 名）

施設の利用者を含めた 13 名が参加。施設長より障害や施設についての説明。見学の後、意見交換。参加者からは、障害者にどのように声をかけたらよいかわからないとの声が上がったが、皆で話し合う中で、声をかけることに躊躇することは、相手の障害の有無に関係はないことに気付いた。障害は特別ではないという気づきの場になった。明星委員より、皆が生きにくくなっている世の中をつなげる役が障害者であるとの意見をいただいた。この話もネリーズで広めていってほしいと思う。

◆（石神井地区）平成 29 年 2 月 2 日（木）於：石神井障害者地域生活支援センターういんぐ（参加者 27 名）

まずアイスブレイクとして、ういんぐ利用者の司会で「石神井といえば何だろう」石神井ビンゴで和やかにスタート。フローラ石神井公園とういんぐから、ネリーズエピソードの発表。その後の意見交換では、日ごろから顔を合わせておくことが大事で、付き合いのないところにふれあいはない、との意見あり。人が集まれるような催しを通して、お互いを知る機会を作り、ネリーズを広めていくことが大事。

【資料 3】 ネリーズかるた

主に子どもを対象としている。ネリーズについて遊びながら学べるものとして作成。小中学校、児童館など約 450 か所に配布予定。各懇談会で募集開始。29 年度末には完成を目指す。

【資料 4】 現時点で集まっているエピソードの一覧。

【資料 6】 ネリーズ勉強会。全 3 日間。（参加者のべ 29 名）

◆1 回目：経営管理課長より、公的支援だけでは生活が満たされない現代だからこそ、ネリーズが求められているとの説明。

◆2 回目：土支田地区の関口さん、南大泉の豊さんをゲストに、地域で実際活動している方から、困りごとや課題に気付く事例紹介を行い、その後、街歩きを行った。

◆第 3 回：参加者自身がやっていること、やってみたいことを語り合い、意見交換を行った。課題が見えにくい現在において、改めて地域のつながりが大事で、地域の課題にどう気づいていくかが大切であるとの感想。深めたいことが見つかった人もいた。次回以降は、実施内容等、さらに精査して実施したい。

【資料 7】 ネリーズ通信第 5 号。4 コマ漫画は、ネリーズシンポジウムパネリストのエピソード。

J:COM 映像放映

4. 意見交換「今後の第 4 次地域福祉活動計画の推進方法について～第 5 次地域福祉活動計画の策定を見据えて～」

①ネリーズと地域福祉コーディネーターの協働による小地域福祉活動の推進について

②計画の取り組みをわかりやすく伝えるための広報について

委員長 前回の策定・推進評価委員会で意見を求めたが、時間の関係もあり、なかなか意見が集まらなかった。後日改めて委員に意見を募ったが、様々な意見があつてうまくまとまらなかった。本日は、もっとざっくばらんに意見を出し合っていきたい。

職員 委員長の前回の策定委員会で、今後の行政の計画も説明していただいたうえで、今後の小地域福

祉活動などの意見を求めたが、時間の制約もあり、まとまらなかったため、後日文書で再度ご意見を寄せていただいたところ。今回は、前回の委員会の内容を踏まえ、第 5 次計画（平成 32 年度～）を視野に入れた、意見交換をしていきたい。その前に、前回の内容の振り返りと、第 5 次計画の見通しについて説明したい。資料 5 参照。

1. ネリーズと地域福祉コーディネーターの協働による小地域福祉活動の推進について
現状と今後の前段については、西川より報告した通り。「ゆるやかに見守りあえる地域づくり」を行っている大泉西地域は、住民が主体的に取り組むサロン等の地域づくりに関わりながら、顔の見える関係を継続していく。谷原地域は、地域の会議等に継続的に参加しながら関係を構築していく。北町地域は、地域団体・行政と協力しながら団体交流会を継続して開催していく。

2. 第 4 次地域福祉活動計画の取り組みをわかりやすく広く伝えるための広報の仕方について
現状と今後については、ネリーズの取り組み等を住民に周知するため、映像等でわかりやすく伝える工夫をする。行政との話し合いの中で、来年度、地域福祉コーディネーターが 1 名増員されることになった。

【資料 5】 第 5 次計画に向けた見通しについて。

第 4 次計画の推進と、第 5 次計画の策定イメージを作成。現在、平成 30 年度の就労促進協会との統合に向けて、職員間での意見交換や運営面での協議を進めている。統合は、第 4 次地域福祉活動計画の期間中にあること、また、就労促進協会についても中期事業計画の期間中にあることが改めて確認された。第 5 次計画は、障害者就労支援実施計画も考慮し、平成 30 年度から 31 年度を策定期間として進める予定。

<意見交換>

【資料 5】 障害者就労促進協会との統合について。統合は、第 4 次地域福祉活動計画の期間中にあること、また、就労促進協会側の中期事業計画の期間中にあることが改めて確認された。障害者就労支援実施計画（平成 27 年度～31 年度）との連動で平成 30 年度から進めていく予定。

【意見交換】

職員 社協を取り巻く状況の変化の中で、今後、計画をどのように進めていくのが良いか意見を求めたところ、小地域福祉活動、ネリーズ等、概ね今のまま進めていけばよいのではないかと、という意見をいただいた。ただ、時間の制約があり、十分な議論はできなかつたため、後日改めてご意見を募る文書を送った。一度意見をまとめようと思ったが、うまくまとまらなかった。お寄せいただいた意見を皆で共有するというので、発表をお願いしたい。

職員 委員の皆さんからは、意見をお寄せいただいたが、やはり生の声でディスカッションした方がよかったかとも思い、このような場を設けた。委員の意見を聞くだけではなく、活動計画を進めている中で感じていることなど、職員も含めてディスカッションできれば良いと思う。

◆山本委員の意見：ネリーズのメンバーの地域分布はわからないが、大泉西近辺や練馬区東部の参加者が少ないのではと推測している。それならば対策が必要。また、モデル地区における担当職員による推進活動から、ネリーズ体制となったことで、全社協をあげての取り組みとなったことは喜ばしいこと。プロジェクトの達成には、時間と工夫が必要だが、社協全体が参加し、組織の活性化につながっていることは評価する。社協は多くの事業を行っているため、全体を示そうとすると印象が薄くなる。一般向けの広報は、わかりやすく簡潔な言葉で、今期の重点を強調する程度でよいのではないかと。区報をもっと活用できないか。

委員 光が丘・大泉懇談会に参加。面白かった。大泉さくらでの開催時、時間が足りなくなるくらい皆よくしゃべった。人ってこんなに自分の話を聞いてもらいたいんだな、と思った。所長から、障害のある人に対して、おせっかいなくらいやってくれていいですよ、との話があった。とても

心に入ってきた。さくらの所長の話が良いと、他の人にもあの話聞いてほしいと思うけれど、ネリーズの趣旨からいって、やってもらうのではなく、自分が伝えていくことが大事なのは。実践する場も与えられて良かった。聞いた話を実践したり、伝えたりすることが懇談会の面白さ。光が丘は、夢工房で実施。建物が立派すぎて、地域の方が入りにくい。懇談会を開催したことで、地域の方も入りやすくなった。まず障害者を知ることが大切。知ったことを伝えていくことが大切。大小さまざまな懇談会をたくさんやるのが大事。すぐに成果は上がらないかもしれないが、着実に広がる。懇談会を丁寧に積み重ねていくことは大切だと思った。皆さんの意見をきいたら、また考えが変わるかもしれないが。

職員 さくらでは、ふだんはわからない障害者の困りごとの説明を聞いた。参加者も納得していた。参加者それぞれ今やっていることを細かく報告。様々な切り口でのかかわり方があることがわかった。

委員 大泉学園街づくりネットが 10 周年を迎えた。お店のスタッフやボランティアなど、参加している方にネリーズを勧めている。高齢者向けの食のほっとサロン参加者 8 名のうち 7 名が登録。参加者は「自分は年だから」と年齢を気にするが、だからこそ知り合いが多い、当事者目線で困りごとを吸い上げることができる。何か参加したいと思っている人は多い。「大泉病院の話し相手しかできない」というが、それがネリーズだと伝えている。民生委員にも勧めている。お店を通して拠点としていろいろな人がつながっていくことが大切だと思う。

委員 このような会議に参加して、役立つのかと思うことがある。人間には、理性と情がある。今日の会議は理が優先。論理的に議論することは大切だが、行動していくことのほうが大事。いま私たちがやっていることは、砂漠に穴を掘って水を入れること。行動を通して情でつながることが大事。

職員 職員からネリーズの増やし方について発表してほしい。

職員 これから何かしたいという方にお勧めしている。

職員 メンバー対象の茶話会「利用者懇談会」でお誘い。きららは商店会の一員としてまちづくりと一緒にやってきている。活動意欲はあるものの、利用者から病状について相談されることもあるため、ひとりひとりの状況に合わせて活動を考えている。メンバー同士で口コミ的に広がっている。

職員 母親が敬老会に所属。ネリーズとボランティアの違いは、地域のことを思ったり、つながっていくところだと思う。母や母の友人やっていることはネリーズだと思うが、登録にはつながっていない。ネリーズ予備軍がたくさんいると感じる。また、第 2 回目の地区懇談会でも、年代が偏っているとの意見があった。高齢層が多い。今後は、小・中・高校・大学生の情報発信力も活用しながら、若い世代への周知を図りたい。

小学生は、帽子にねり丸のバッジをつけている子が多い。同じようにネリーズのバッジをつけてもらえるような広がりになれば良いと思う。

職員 権利擁護センターでは、職員からネリーズについて説明を受けた生活支援員が地域で広めてくれる。職員が直接説明するより、日ごろの付き合いのある人の説明の方が入る。

職員 練馬の社会福祉士の地区会の中で、社協について話す機会があり、ネリーズ説明。メンバーは、福祉業界で働いている人がほとんどなので、そもそもネリーズ。それをもっと地域の中でいろいろな情報をキャッチしたり、情報発信してもらえれば、それもネリーズであると伝えた。その場にいた全員にネリーズ登録してもらった。

また、生活サポートセンターの業務の中で、相談者の困りごとが解決したのち、ネリーズに登録することもあった。友人を引き連れてネリーズ登録した。

職員 石神井地区の懇談会 2 回目はういんぐにて開催。1 回目に参加した白百合利用者が行きたいと言ったため、ういんぐ・白百合双方の利用者、地域のボランティアの方、民生委員、職員で開催。

白百合の利用者は、場馴れしていないせいか、退屈してしまったり、話についていけない部分はあったかもしれないが、まちでこんなことがあってうれしかった、こんなことで困った、と発信をすることができ、これからの可能性を感じた。

職員 かたくり近くの小学校で子どもたちを誘導しているおじさんをネリーズに勧誘。次の日からネリーズの毎バッジを付けてくれた。子どもから「かたくりの人はどうして独り言を言いながら話しているのか」と聞かれたが、うまく答えられなかった。でも、ネリーズのような活動を通して、そのようなことも伝えられるようになったら良いと思った、との話をしてくれた。まさにネリーズだと意気投合した。

職員 かたくりの利用者が独り言を言いながら歩いている理由を何と答えたのか。

職員 おじさんは「みんなも病気とかするでしょ。それぞれ得意なこと不得意なことあるでしょ。かたくりの利用者も同じだよ。」と答えてくれたとのこと。病気で産まれる人もいるし、障害を持って産まれる人もいると説明したとのこと。

職員 そのような発信の仕方は、ネリーズ的で非常に良いと思う。

職員 職員からネリーズの増やし方について意見が出たので、今度は委員の方にご発言をお願いしたい。

委員 ネリーズを増やしていくためには、「戦略」が必要ではないか。小さな良いことを積み重ねるのも大切だが、人の善意をよりどころとするよりも、もっと効果的な視点があったほうが良い。私たちは、どんなことをすると人が喜ぶのかというポイントが実はわかっていないのでは。言ってみたらすごく喜ばれたとか、ちょっとの手伝いで思いのほか喜ばれたということはないか。先日、自宅に来てくれた JCOM の人に「良いお仕事ですね、皆に喜ばれる仕事でしょう」といったら驚かれた。仕事とはいえ、とても助かったと伝えたとこ、ニコニコとして帰った。世の中、苦情はたくさんあるが、良かったね、というメッセージは少ないのではないかと思った。意図していないことで喜ばれることを体験したといったネリーズエピソードをたくさん示してほしい。こうすればつながる、こうしたら喜ばれたというメッセージが広がらないと、わかってもらえないと思う。ネリーズがどんな良いことをしたか、「ネリーズバンク」に貯めることを提案したい。

また、近年、大型店舗が増えることにより、街の商店が衰退していつている。街の商店にこそ、ネリーズマインドを持っている店がある。何かネリーズショップみたいなマークがあると良い。具体的にみんなに知らせていくことが大事。ネリーズの説明は難しいが、子どもから広げていくのが良いのでは。先日のいじめのない学校づくりの番組で、自分がやってもらって良かったことを「ハッピーBOX」に入れ、その内容がお昼の校内放送で流される、という事例を見た。プラスの空気を作るには、やはり具体的に行動することが大事だと思う。ボランティア活動をやることに対し、尻込みするのは、問題解決能力が自分にあるか、と考えてしまいがちだから。そうすると「ちょっと無理だな」と思って引いてしまう。しかし、ネリーズの場合は、つながるための言葉がけからが良い。そう考えれば関わりやすいと思ってもらえるのではないか。

委員 今のアイデアは、とても良いと思う。

委員 人は誰でも認められたり、褒められたりすれば嬉しいもの。褒められれば心を開く。心を開くということは、耳を傾けるということ。だから、褒めるということは、とても良いこと。大賛成。

委員 この中にいると錯覚するが、社協と言っても皆知らない。だからやはり戦略的に進めていく必要がある。自分も 30 年同じ地域に住んでいるが、地域の民生委員と面識がない。町会や消防団の活動もしているが、顔を合わせたことがない。職員である必要はないが、町会のような小さな集まりにも出て行って、社協を知らない人にも響くような活動をしなければならない。

委員 戦略はあると良いが、それだけで地域福祉だと錯覚してしまうことは怖いと思う。知り合いの関西地域の社協の事務局長の話によると、職員はよく地域に出ているが、しくみを作ることが地域福祉だと思っている節があるように感じるとのこと。また、東社協には中学生がよく調べ学習

で来るが、社会情勢や福祉についてよく勉強しているものの、待機児問題について調べたいというにもかかわらず、そもそも幼稚園と保育園の違いを理解していないなど、言葉でしか理解していないと感じる場面があった。同様に、ネリーズが何人いたから地域福祉ができたという話でもないし、ネリーズは、人というよりも「マインド」がどう広がっていくと浸透したと評価できるのか、非常に難しい。

また、学生と話すと、たとえば「高齢化率 30%」と言えば、一様に「高い」と言うが、本当にわかっているのかと。電車に例えて話をした。1両 50 人乗れるとして、高齢者が 30 パーセントだとすると 15 人。うち、優先席は 6 席なので、6 名は既存のしくみ（制度）でカバーされる。しかし、残りの 9 名は、しくみ以外の地域のつながりや譲り合いの気持ちなどが無いと成り立たない、という話をしたところ、ストーンと落ちたようだった。

また、白百合と石神井小の事例（白百合の利用者が小学生から石を投げられたところから始まり、出前授業を行ったものの、一度目は失敗。利用者とともに訪問し、好きな音楽の話をしたところ、質問もたくさん出て、今では名前を覚えてもらえるようになった）については、さまざまところで話しているが、小学生から高齢者まで年代関係なく興味を示す。知らないとそこまでだが、知ってみるともっと面白くなれる。知識として知っていることが知識として固まってしまうと、変わるという感覚があまりなくなってしまう。

もっとネリーズエピソードが積み重なって、戦略として「ステージ」を作れると良いのでは。まずは、ネリーズからエピソードを集める。次に、いろいろな人に伝えていく。今、懇談会をやっているのですが、石神井・光が丘各地区で方法は違ってもよいと思うが、そのような形で戦略が作れば良いなと思っている。

ネリーズというしくみは全国的にも珍しく、特に都市部においては本当に珍しい。ネリーズの良さは、「ネリーズはこのようなくみです」ではなく、考えて自分で動くための材料を提供するところが画期的。「〇〇してください」では、この 70 万都市の人たちを動かすのは無理なので、そのような意味でステージを作って伝えていくために、地域福祉コーディネーターがいなくていいことは重要。

区職員

ネリーズの活動を広報するために区に何ができるか。来年度、人件費 1 名分予算を付けたとか、社協がイベントをやるときに共催名義を出すなどということもできると思うが、具体的に何ができるかを考えた。練馬区においては、12 月が「ユニバーサル月間」となり、ユニバーサルオーケストラをつくることになった。福祉部管理課が事務局を務めることになったため、今年 12 月に地域福祉フェスタを開催することとした。その時に、ユニバーサルデザインの生活用品等の企業の協賛名義をもらえたら良いとか、地域で活動している人を紹介できたら良いのではないかと、といったことを漠然と考えているが、そのような機会でも区と社協がタイアップするなど、区がやるものの中の一つのコーナーとして、ネリーズを紹介するようなものを出すことができるのではないかと考えた。社協の主体的な活動であったり、地域のネリーズがそれぞれ考えることだとは思いますが、社協やネリーズを知らせていくような場の提供として一定の効果があると考えた。

また、林田さんの話を聞いていてヒントを得たことがある。区の計画の中に「まちを笑顔にするための第一歩の推進」というものがある。先ほど林田さんの話で、普段苦情ばかり言われている人に、ありがとうを伝え、喜ばれたというものがあつたが、これこそまさしくまちを笑顔にする活動だと思った。ネリーズバンクのようなものを実施するのであれば、取り組みを区で行う「まちを笑顔にする第一歩の推進」の取り組みの一つとして取り上げることもできるかと思う。区は基本的に側面支援が多いが、区が発信するというので、ある程度役割を担えると思う。ぜひ区の計画も見ただけで、声を掛けてほしい。区としても社協を支援していけると思う。

また、先ほど、ネリーズの年代に偏りがあるとの話が出た。私見だが、いま都立高校のボラン

ティア活動が義務になっているが、何をしてよいかなかなかわからないという声を聞く。ただ単にネリーズの紹介をするのではなく、ボランティア活動の紹介後、次につながる活動としてネリーズを紹介するのはどうか。この生徒が学校などでメッセンジャーになってくれたら、広がっていくのではないか。

委員 受け手側（区民）の認識を変えることが重要。受け手にこちらを向かせるために、区の権威を利用するのは良いこと。もう一つには、企業に金を出させ、名誉を与えることを提案したい。それが区のできることだと思う。ネリーズになることに対する憧れや誇りを持たせるようなしくみは区と協力してできないか。

職員 これまでの話の中では、ネリーズをどう増やしていくか、という視点で意見が出されてきたが、数を増やしていくことだけではなく、懇談会を通して、話したい、知りたい、伝えたい場を繰り返してくこともとても大切だと思っている。まだ自分の中でも揺れているが、今後皆さんと一緒に考えていきたい。かるた標語の募集は、一つの広報ツールとなり得ると思う。地域を良くしていきたいという人を増やしていきたい気持ちはあるが、今日の意見を聞いていて、どこまで戦略的に進めていくべきなのか、迷いがある状態。皆さんから意見を聞きたい。

委員 福祉の業界には「戦略」という言葉はなじまないのかも。しかし、社協職員にはそのような視点を持ってほしいと思う。でも「啓発事業」というと、ちょっと違うと思う。なんとなく空気をつくるという話だと思う。練馬区の子育て支援は素晴らしいと思っているが、子育てに良い街ランキングには20位以内に入っていなかった。あと足りないのは気持ちかな、と思う。と登録人数が増えれば良いか、という議論はさておき、とりあえずエピソードを集めていくことが大事。エピソードは漫画にするとわかりやすい。社協のすごいところは、回覧版という媒体があるのは強い。

あと、もう一つ伝えたいことは、自分がボランティア活動、ネリーズに興味を持ったきっかけについて。聞かれた場合、3人兄弟真ん中の子どもが発達障害。この子が生きづらくないようにするためには、母親が一人で頑張るのではなく、周りの空気を良くすることが大事と考えた中で、地域という視点に思い至った。地域で何かすることによって、また戻ってくるということをこの30年で経験している。自分ひとりでもこのようなストーリーがあるので、ストーリーがたくさん集まってくると、読み物としても面白くなっていくのではないか。そしてその媒体を持っている社協は、ぜひ活用したらいかがか。

職員 具体的な戦略のような話ではないが、大泉懇談会にて、さくらの所長より、ヘルプカードの逆で、「配慮できます」というカードも作るべきではないか、それをネリーズにやってほしいとの提案があった。ターゲットを絞っていくのも一つの方法か。すでに活動をしている人に働きかけるのも一つの方法だと思うが、もう一つは、福祉に全く関わりが無い人にどう働きかけるかということも戦略の一つ。大泉の福祉作業所で地域の朝市をやった時のこと。お祭りの時とまったく客層が違った。同じ地域で広報しているのに、客層が全然違うということは、非常に興味深い。ここは何をしているところか、との質問もあった。そのような場でコマーシャルできたことは良かった。本当に興味がない人たちにどう興味を持ってもらうか。企業にお金を出してもらおうなどして、さまざまなどころに出ていくことも方策の一つだと思う。

職員 ネリーズはマインドを育てる活動。委員が話していた電車の話のような経験がある。昼間の都電は、高齢者が多く乗車しており、誰に譲るか迷うような状況がある。おそらく皆そう思っているも行動する勇気みたいなものがなくて結局誰も譲れずに終わってしまう。ヨーロッパやアメリカでは、車いすの方が外出する際には、段差があっても、どこかからか自然と手助けがあるという話もある。

それは「マインド」が育っている証拠。ハード面を整えることは大事だけれど、マインドを育て

ることが、区の計画にもある「まちを笑顔にする第一歩」にもつながってくると思う。また、社協はもっと企業への働きかけをすべき。味方につけること。社会貢献を行っていきたいと考える企業は多いはず。社会貢献を進める仕掛けを作る。すでに社協に協力してくれている商店や企業がないわけではないが、もっと外に視野を向け、企業側のやりがい応えていくことが重要。

ういんぐでのエピソード。町会側に、障害のある方に何をしてもらうのが良いかと聞いても、なかなか出てこなかった。逆に何に困っているかを聞いたところ、地域の掲示板の作業がたくさんあって力も必要なので大変だということだった。この掲示板の作業を今では利用者も張り合いをもって取り組み、町会も助かっているとのこと。相手が何に困っているか聞き出す技術、気付きの視点を持つことが大切だと思う。同様に企業からの協力を得ることが大切。

委員 企業に対価を与える、それは名誉。人間は褒められるとうれしいもの。企業も評価されればうれしい。役所の効果は大きいと思う。

6. まとめ

職員 今回は、「今後の第 4 次地域福祉活動計画の推進方法について～第 5 次地域福祉活動計画の策定を見据えて～」として意見交換していただいたが、第 5 次計画の具体的な内容まではできなかったものの、第 4 次計画を進めるうえでは、第 5 次計画を見据えていかなければならないと改めて意識したところ。

委員長 今日は、いつもよりもたくさんの方にいろいろな話をさせていただいて良かった。今日だけで結論が出るわけではないが、今後もこのような場を重ねながら、どのような方向にしていくか、話を詰めていければと思う。昔から「情けは人のためならず」という言葉があるが、今は「情けは人にかけてはいけない」という解釈となっているよう。不寛容な社会になってきているということをもつと感ずる。そのような中で、少しでも優しい気持ちになっていけるような社会になればよいと思う。

副委員長 今日は、たくさんの方のアイデアが出てきた。一人ひとりがつながり、支えあうのがネリーズ活動だと思っている。気になるのは、団体としてのネリーズ登録があるが、個人で登録すべきでは。白百合・かたくりの利用者がネリーズになった時は、どうしているのか？

職員 白百合では、利用者に対しては「こういう活動がネリーズだ」という説明ではなく、一つ一つ積み重ねていく中で少しずつ理解を深めていってもらっている。一人ひとり「登録」という形を取っているわけではなく、現状では利用者個々に合わせた「ネリーズマインド」を伝えていっている状態。

副委員長 伝え方にこだわりを感じる。そのようにして増えていくネリーズは、きっと地域を変えていくだろうと思う。

職員 今回報告した懇談会やかたるたなどの取り組みをそのまま進めて良いのか。改めて委員の皆さんに確認したい。

委員長 かるた標語は、一般募集はしていないのか？

職員 今日の資料では、各懇談会で上がったエピソードを掲載。今後は懇談会以外でも募集予定。まだネリーズになっていない方も可。

委員長 完成はいつか。

職員 平成 30 年 3 月末を目指している。資料 3 ご参照。資料 7 のネリーズ通信にも標語募集記事掲載。

委員長 もっと PR して、懇談会でも応募用紙配布するくらいのことはしたほうが良い。

委員一同 このまま進めて良いと思う。

7. 次回日程

平成 29 年 6 月下旬を予定。

会場等調整し、改めて連絡。

現委員の中で辞退希望者あり。地域の中でふさわしい方がいたら委員の皆さんからもぜひご紹介いただきたい。

以 上